

2015年5月28日(木)

なぜ、夕張市民に学ばねばならないのか

浅野泰世

病院が無くなっても夕張市民は幸せに暮らしている。常識では信じがたい事実を、先生は私たちに納得させて下さいました。

①市民全体の死亡率も、代表的な疾病による死亡率も変わっていないという数値データ、②人々の生活に寄り添い、そこから得られた言葉と笑顔。私たちの将来は決して暗いものはないという、希望を抱かせて下さいました。

夕張市民の意識改革は、彼らの意志に関わりなく病院機能が失われた時、手遅れになって命を落とす隣人ではなく、自宅で満足して天命を全うする人を多く目にしたことによりなされたのでしょうか。自らの体験によって、医療に依存することが賢い選択ではないと、知る機会を得たのです。

翻って、都市部に住む限り、医療機関へのアクセスは容易です。皆保険制度のおかげで、科学的根拠があると認められた医療の多くを、ほとんどの国民が、許容できる負担で受けることができます。医療サービスを最大限利用し、その甲斐あって多くの人が社会復帰を果たすのを目にします。

病院で死亡する人が80%を超える状況では、人の最期の在りかを問う機会は得ることは稀です。このような中で、私たちが医療依存の状態から抜け出すことは、容易なことではないように思われます。

奇しくも講義を伺った4月28日に「国民健康保険法改正」が衆議院を通過しました。そこには「患者申請療養」制度の創設という、私たちの医療を大きく変えかねないことが含まれています。

これまでは、承認された医療機関の申請によってのみ認められた混合診療を、“患者の申請”によっても認めようというものです。

国の財政状況を考えたら、医療費が伸び続けることは許されません。

一方で現政権にとって、医療は経済の成長戦略の重要な部分です。自由診療の枠を広げ、公費が支払う医療費を抑制することで、皆保険制度を守ろうというのでしょうか。

すでに、「先進医療特約」といった民間の医療保険が売り出されています。日々新たな医薬品や治療法の情報を目にする私たちは、民間の保険を買って公的な保険の枠外の医療を受ける準備をすることになります。

しかし、民間の保険が私たちが公的保険外の市場に連れ出してゆくなら、国民皆保険制度はその役割を縮小してゆくことにならないのでしょうか。このようにして、国民皆保険制度を守るための政策が、それを葬ってしまうことにつながるのでしょうか。

夕張市民の医療とのかかわりには、国民皆保険制度を守り抜く、もう一つの道が示されていました。

それは、入院医療を自ら受けない、という選択もありえ、それがその人らしい生涯を全うすることにつながるというものでした。

私たちは今、誰もが等しく医療を受けられる国であり続けるか、お金の有る無しによって受ける医療に差があることを容認する国となるかの岐路に立たされているように感じています。

そして、私は前者を望み、そのために出来ることをしたいと願っています。自らの意志に関わりなく、多くの医療サービスを奪われたときに夕張市民が選んだ行動を、そのまま私たちが選ぶことはできないかもしれません。それでも、彼らのことを知り、彼らに学ぶことは、私に数々のヒントを与えてくれました。

有意義なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。